

經濟學全集第二十八卷にをさめられた加藤博士の支那經濟史は、簡單ではあるが、古代から清に至る支那經濟の發展を概説した、最も信頼し得る文獻として定評のあるものであつた。しかしこれは全集の一部であつたので、たやすく手に入れることができない憾があつた。ところが、これを増補したものが、單行本として、弘文堂から刊行され、ひろくその道に關心を持つ人々の書案におくられたことは、まことに欣快にたへないところである。

本書は全部で十一章、序説で支那經濟の發展を五期に分けて概観した後、戸口、土地制度、食料生産、衣料生産、工藝、商業、交通、外國貿易、貨幣、物價の各章に分け、それぞれについて、古代より清代に至るまでの状態を略述したものであつて、經濟學全集本に比して、農産物、工藝についての記述が著しく附加され、貨幣の章でも、通貨商及び貨幣市場、信用證券の二項があたらしく設けられてゐるほか、必要な所依の典據についての註記がほどこされてゐることは、後學にとつて有難いことである。

いつであつたか、京都に經濟史の學會があつた際の公開講演で明代産業の發達とかいふ博士の講演を聴いて、はじめて博士の風貌に接したのであつたが、それ以來博士の書かれたものを讀むごとに、この時の博士の講演がおもひだされる。博士は群書を博渉して丹念に過去の事實を探究される。その論述には、わかいものをあつと言はせるやうなはなばなしはないが、何か隙のないてがたさを感じさせる。本書にしても、僅か百六十頁の小冊ながらこの博士の長年月にわたる精細な部分的探究の結論であることを

思ふとき、その一字一句が千鈞の重みを持つものと考へてよからう。

しかし叙述の方法が上の如きものであるかぎり、どうも物足らなさを感じさせる。經濟現象を構成する要素が究明されても、それはやはり經濟現象の部分品ができ上つたにすぎないのであつて、叙文で博士自ら云はれるごとき「三つか四つの時代に分け、その時代時代の政治・社會と經濟との關係を明かにし、同時に經濟現象そのもの、叙述もかなり委しくして本書の二三倍の分量とし、質に於いても一段の精練を加へ」たもの、世に出る日が待たれる。わがくにの支那經濟史研究の開拓者であり、育ての親である博士が、多年の研究をもとゝして完成されるかゝる經濟史こそけだし學界のすべてが待望してゐるところであらう。昭和十九年三月五日、弘文堂刊、A5判一六〇頁、寫眞一六葉、定價三一五圓（波多野善大）

西洋史研究 第一輯 西洋史研究會編

昭和七年六月に創刊された本邦唯一の西洋史學専門雜誌である「西洋史研究」が、昭和十五年十二月に第十五號を出して一時中絶して以來、既に數年になる。學界に多大の功績を残したこの雜誌の再刊は、單に専門學徒のみでなく廣く我國史學界、並に知識界の要望する所であつた。然るに今再び同じ題名の下に更に一層豊富なる内容をもつて本書が公刊されたことは、この要望が満たされたのみならず、「西洋」の再檢討、その本質解明が緊急の必須事

とされてゐる現下の要請にも亦充分に答へるものである。

本書に収録されてゐる論文十一篇、紹介八篇は、夫々相互間に必ずしも有機的統一をもつものではないが、その多彩な内容は、一面我國西洋史學界の分野の廣さと豊かさを示すものであり、夫々の論文にみられる眞摯な研究態度はその水準の高さを物語るものである。本書に於いて廣き意味での思想史、精神史の論文が可成り多數を占めてゐること——例へば原博士の「ギリシアに於ける政治思想の簡史」、山上氏の「カントタベリ物語序説」、大杉女史の「ヒュームの史學について」、大類博士の「フリードリヒ・シュレーゲルの近代史觀」、金澤氏の「ミシュレと歴史」、池田氏の「トライテケに於ける獨逸統一の理念等」は自づと本邦西洋史學の一主要傾向を示すものと云へよう。他面社會史、政治史關係の諸論文——例へば中原氏の「シュメール都市國家の平民」、近山氏の「西ローマ崩壞に就いての一考察」、山中氏の「フシーテン運動の影響について」、長博士の「ヒュブナア九年記に觀るクリム戰役終局」、中山氏の「二つの國家系」等——にみられる獨自な研究も亦この領域に於ける新傾向の胎動を告げるものと考へられる。

これらの諸論文の「々」についてその内容の紹介は勿論紙幅の許す所ではないが、それらがいづれも我國學界に貢獻する所多いであらうことはいふ迄もない。それにも増して評者が祝福したいのは、從來動もすれば、割據孤立的傾向があつた本邦西洋史學界の巨星俊秀達の間、本書を通じて深い聯關性が醸成されたことである。西洋史學界のいはゞ一大合同が斯學の進歩に寄與する所大

なることは、夙に評者等の念願してゐた所であるが、今その第一歩が事實上踏み出されたことは、衷心から喜ばねばならぬ。この第一歩を正しく繼承してゆくことこそ今後の我々後學の課題であり任務である。

あらゆる部門に於いて總力戰的體制への切替へが要求されつゝある今日、西洋史學界に於いても亦かゝる體制の樹立を必要とすることは當然である。漫然たる寄せ集めではなくして眞に強力な有機的聯關をもつ研究體制の整備こそ緊要である。現下最も必要とする問題の同一主題の下に、各學徒がその全智能を集中發揮することによつてこの要求に幾分かでも答へうるのではなからうか。文獻目錄の作成の如き極めて地味な仕事、その基礎的準備として不可欠なものではなからうか。眞に學術報國の念に燃え、滅私奉公の精神があるならば、かゝる體制の確立も決して難事業ではない。黨派的な學閥心を一掃することこそ何よりも先づ先決事である。

地上にまかれた良き種は健やかに育てられねばならぬ。本書の刊行を機として本邦西洋史學界が更に一大飛躍をとげることが切望する次第である。(生活社刊、賣價六圓二〇錢) (前川貞次郎)

近世國際關係史論集

大村作次郎著

最近のやうに所謂際物やその場限りの出版物の氾濫する中に本書の如き眞摯な研究が公にされたことは、獨り學界ばかりでなく廣く我邦文化水準維持の爲めにも洵に喜びに堪へない次第であ